

化学工学会 第49回秋季大会
シンポジウム<(3) 晶析による粒子群製造・分離精製の最先端> 報告書

オーガナイザー

滝山 博志 (東京農工大学) (記)

前田 光治 (兵庫県立大学)

五十嵐 幸一 (大阪市立大学)

日野 智道 (三菱ケミカル(株))

晶析技術分科会が主催した本シンポジウムは、全て公募によるもので、合計19件の講演発表が行われた。晶析は、医薬・食品・新材料製造に晶析は欠かせない技術となっているが、本シンポジウムでは晶析の強みである粒子群製造や分離精製についてその最先端の技術研究発表を行い議論することを目的に企画され、本秋季大会の3日目の最終日に開催された。企業から5件、大学から13件、産総研から1件の発表が行われた。昨年に引き続き、企業からの発表を促し今年度は5件の発表があった。企業研究からは、晶析技術の実用化に関する話題提供と課題抽出が行われた。本シンポジウムの特徴は、凝集結晶に関する研究発表が3件、微小結晶作成などの核化現象に関する研究発表が3件、特定の物質に関する研究発表が、2種類で2件毎の合計4件であった。質疑の時間には会場の方の多くの研究者からの質問が寄せられ、活発な意見交換ができた。

発表12分、質疑7分(交替1分)であることは事前に案内できていたと思われ、ほぼタイムテーブル通りに発表を進行できた。発表が15分の時には、シンポジウムの最後に総合討論の時間を用意していたが、質疑時間は充分であったと思われ、総合討論の時間は特に設けなくても良さそうな印象であった。

1セッション1名の座長で進行したが、1座長の受け持つ発表件数が4件以内としていたので、支障なくセッションおよびシンポジウムの進行が行えた。大会実行委員会の推奨通り、セッションの間に20分の休憩を挟み、タイムスケジュール的には余裕のあるスケジュールであった。

以上